

： 刊行にあたって ：

近年、インプラント周囲炎の問題が取り沙汰されているが、依然インプラントの信頼性は高く、専門家の間では欠損補綴の第一選択になっているといっても過言ではない。しかし、いったんインプラントが口腔内に装着されると、その患者のその後の治療は、インプラントを中心に修復治療が制限されることになる。患者の将来の全身的な状態、あるいは経済的な状態がインプラントを受け入れる状況にないときに、インプラントと天然歯、あるいは義歯との共存について確立されていなければ、将来的に負担は患者にのしかかる。

確かにパーシャルデンチャーは、インプラントと違い、残存歯に何らかの負担を強いる修復物であり、それゆえ、「抜歯鉗子」と揶揄されることも少なくない。しかし、パーシャルデンチャーは1歯欠損から1歯残存までの欠損修復に対応でき、歯が存在するほとんどすべての欠損が適応症例となる。インプラントが今後ますます欠損修復の主流になったとしても、決してパーシャルデンチャーの需要がなくなることはないが、パーシャルデンチャーの設計の考え方を理解している歯科医師が少なくなっていることも事実である。

「パーシャルは難しいね」という話をよく聞くが、実は、あまり考えないで設計をしても、義歯が口腔内に収まってくれるのもパーシャルデンチャーである。難しいと思っている人は、残存歯の将来的な保全まで考えてのことだと思っている。1歯だけの欠損から1歯だけ残存している症例まで、欠損の分布だけを考えても、パーシャルデンチャーの設計のバリエーションは限りなく多い。さらに、対合関係、残存歯の状態、顎堤の状態、患者の経済的要因や心理的要因、年齢も加味すると、義歯の設計をどうしたらよいか悩むのは当然であろう。症例報告から得られる臨床のヒントは多いが、それぞれの患者との契約のなかで出来上がった症例であって、一般化されるものではない。実際、自分が義歯の設計をしなければならない状況になったときに、どのような手順で設計を考えていけばよいのだろうか。

本書のタイトルである「Best Denture Design」は、デンタルダイヤモンド社から「徐々に歯を失っていくときに、その患者さんの年齢、生活習慣、咬合状態によって考慮すべきポイントは違うのではないか。それぞれの患者に合ったパーシャルデンチャーは何かを開業医のために書いてほしい」というお声がけから企画されたものである。

教科書は理解しているが、どのように設計してよいかわからない。何か参考になる本はないか。エビデンスがなければ治療の根拠が確かではないと言われるなか、あえて経験則（パターン）に則った実践的な設計の本が必要と感じて書かせていただくこと

にした。パーシャルデンチャーの設計に限らず、それぞれの状況に直面したときに、自身のもっているパターンを増やして、引き出しを多くすることが大切である。ただし、その引き出しも、整理されていなければ、何がどこに入っているかがわからない。本書はできるだけ引き出しの整理を行って、いつでも必要なときに取り出せるような構成にした。

本書で扱う義歯は、原則として、サーカムフェレンシャルのクラスプデンチャーである。インフラバルジのクラスプデンチャー、オーバーデンチャー、アタッチメントデンチャー、ノンメタルクラスプデンチャー、インプラントを併用した義歯は、通常のクラスプデンチャーでの問題解決のためのツールとして考えてみるとよい。大切なのは、どのように欠損を見るかである。

20年近く大学の部分床義歯補綴学の教室に残り、研究、教育、臨床を通じて多くの師からいただいたもの、さらに開業してからの10余年、患者さんからいただいたものを通じて、パーシャルデンチャーの考え方と臨床のヒントを紹介できればと切に願うものである。

最後に、デンタルダイヤモンド社の安斎清幸氏、近藤佳代子氏から多くのアドバイスをいただき、出版できたことをここに感謝申し上げます。

東京医科歯科大学部分床義歯補綴学分野の現教授である若林則幸先生には、日頃より現在の部分床義歯の考え方をご教示いただき感謝申し上げます。また、同教室員の犬飼周佑先生、和田淳一郎先生はじめ、多くの先生にご示唆をいただきました。改めて御礼申し上げます。さらに、本書の内容の多くは、同教室の教授でありました藍稔先生、大山喬史先生、五十嵐順正先生はじめ、後藤忠正先生、安田 登先生、腰原偉旦先生、その他多くの先生のご指導の賜物と感謝しております。

2015年1月7日 自宅にて

東京都・千駄木あおば歯科 院長
谷田部 優

注) 本来、パーシャルデンチャーという言葉は、日本補綴歯科学会の用語集では推奨されていない。正確に言えば、リムーバブルパーシャルデンチャー (Removable Partial Denture) であり、日本語では部分床義歯と呼ぶべきである。ただ、ブリッジやインプラントという言葉と並列するときに部分床義歯ではいささかバランスが悪い。一般的にデンチャーと言えば、可撤性義歯を示していることから、本書では部分床義歯をパーシャルデンチャーと呼ぶことにした。